



Title	蘇斯岐屯倉と丹波の杣
Author(s)	桐井, 理揮
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 669-678
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

蘇斯岐屯倉と丹波の杣

桐井 理 揮

1. 本論の課題

『日本書紀』安閑紀には、安閑2年（535）5月に全国26か所にミヤケが設置された記事が見える。九州から東国まで各地に屯倉が設置されたことを示す記事として著名であるが、具体的な開発記事が伴うわけではなく、実態が明らかになっていないものも多い。

屯倉については、近年では考古学の分野から言及されることもあるが⁽¹⁾、多くの論者が指摘するように、多様な屯倉の存在形態に対して、どのような考古学的成果をもって屯倉の要件とするのかは定まっていない（仁藤2002、菱田2013など）。しかし、推古朝以前の屯倉の初源が6世紀代以前にあり、土地経営のみならず政治・軍事的拠点、あるいは殖産の場であったことが共通認識となりつつある（舘野1978・1991、平野1985、上原2003ほか）。かつて想定されたように倉庫が累々と立ち並ぶ景観ではなく、土地開発や手工業生産の展開を含めた地域開発史の中に屯倉の存在を後付けることが可能な状況となっている。近年の研究を総括した山路直充が、屯倉の実態に迫るためには各地の屯倉推定地の考古学的動向を捉えることが一義的に重要であると指摘するように（山路2005）、文献史料の増加が望めない以上、地域論の蓄積から帰納的に研究を進めることも必要であろう。

本論では、地域史からの視点として、先述の『日本書紀』安閑紀に記載がある「丹波国蘇斯岐屯倉」について、近年の発掘調査の成果を用いつつ検討を行いたい。

2. 蘇斯岐屯倉と犬飼遺跡

蘇斯岐^{そしま}屯倉については、『日本書紀』安閑紀で、全国に設置した26の屯倉の一つとして登場する以外には、史料には一切登場しない。そのため、その詳細な所在地は確定していないが、京都府亀岡市を中心とする桑田郡に、延喜式内社である「三宅」神社が存在することから、この付近が有力な候補の一つとされてきた（上田1961ほか）。黛弘道は、残証地名から「イヌカイ」と「ミヤケ」が近接してみられる例が複数あること、犬養氏がクラにかかわる氏族との関係が認められることを指摘し、犬養氏の職掌について、大王の直轄領であるミヤケを守衛することであったと説く。その中で亀岡市の犬飼地名についても、近隣に延喜式内社の三宅神社が

小地域	遺跡名	6世紀		7世紀		8世紀		9世紀
		前	後	前	後	前	後	前
船井部	天若							
	美里							
	八木嶋	●						
桑田郡	千代川							
	(桑寺庵寺)					正		
	北金岐					●		
	大田	●						
	鹿谷	●						
	佐伯	●						
	(佐伯庵寺)					正		
	杉南							
	池上							
	池尻					●		
	(池尻庵寺)				正			
	時塚・車塚							
	馬路							
	蔵垣内	●						
	(国分寺)						正	
	(国分尼寺)						正	
市部	河原尻	●						
	篠							
	(観音芝庵寺)							
南西部	大岡		●		●	●		
	金生寺					●	●	
	(興野庵寺)					正		

● 遺跡あり 建物～5棟 建物6棟～

図1 亀岡盆地の古代の集落

に由来があるとし、蘇我氏勢力の地方進出を示す事例であるとした。そして、6～7世紀に蘇斯岐屯倉が設けられ、蘇我氏の私部が設置されたとみる（加藤1983）。対して、和田萃氏は、一歩進んで蘇斯岐屯倉は蘇我稲目の主導で設置されたものと考え、黛氏の論を引きつつ、その具体的な比定地に「曾我部町」犬飼周辺を想定している（和田1996）。

このように、文献史学から丹波の屯倉については、亀岡市三宅町説と亀岡市曾我部町犬飼説が提示されており、近年の研究成果からは曾我部町犬飼周辺を推す説が多い。しかし、いずれも遺存地名からの提言であり、史料の少なさからいずれの説とも検証材料が不足していた。そのような状況のなか、近年、曾我部町犬飼周辺に位置する犬飼遺跡、金生寺遺跡で継続的に発掘調査が実施され、古墳時代から奈良時代にかけて大規模に耕地開発が行われていたことが明らかとなった。次節以降では、蘇斯岐屯倉の有力な候補地である曾我部町内の近年の発掘調査をもとに、地域社会の展開について検討する。

3. 曾我部町の古代の開発と木材加工遺構

古墳時代前・中期の開発 古代の様相について検討する前に古墳時代中期以前の様相について簡単に触れておく。当地域では、古墳時代前期の遺物を伴う流路や溝が多く地点で検出されているが、弥生時代以前に遡る資料はほぼ出土していない。水回りの悪い段丘上での開発は古墳時代前期以降に本格化すると考えられる。

古墳時代前期には、段丘上の放棄流路を利用した大規模な水利施設が複数の調査地点で確認

所在していることから、「イヌカイ」と「ミヤケ」が関係する一例として挙げている（黛1982）。この両氏の研究により、正確な位置はともかく、丹波の中でも桑田郡に屯倉が設置されたことが定説となった。犬養氏と屯倉の関係性については、『続日本紀』に見える「県犬養連」は本来は「郡犬養連（コホリノイヌカヒ）」であったとして、大化前代の犬養氏と屯倉の関係を論じた鎌田元一の研究や（鎌田2001）、それらを批判的に継承する生田敦史らの研究（生田2018）により、より確からしさを増している。

加藤謙吉は、「イヌカイ」地名が遺存する亀岡市曾我部町犬飼について、「曾我部」という地名には『和名抄』に記載のある「宗我部郷」

されている。犬飼遺跡 7 次調査（桐井ほか 2023）で検出された水利施設は流路護岸層から初期須恵器とみられる土器が伴い、4 次調査でも TK216 ～ 208 型式期の須恵器を伴う水利施設から分流させた直線的な水路が総延長約 100 m にわたり検出されている（竹村ほか 2024）。金生寺遺跡 7 次では布留式中段階の合掌状の木組みを基礎とした堤体および溜池が検出された（桐井 2021）。これらは弥生時代には開発が及ばなかった段丘上の初期の開発事例としては重要だが、あくまでも放棄流路や天水を利用した開発であり、河川から恒常的に取水する体系的な水利システムを構築するには至らず、いずれの地点でも中期中葉までには廃絶している。

古代の開発 中期後半から後期前半の遺構は、当地域では希薄であり、各地点で散発的に土器が出土するのみである。後期前半に、遺跡の西側の丘陵では 50 基以上からなる法貴・法貴北古墳群が造墓活動を開始しているが、居住を示す遺構は検出されておらず、土地開発の痕跡が見えるのは古墳時代後期後半以降である。

犬飼遺跡 10 次調査では畦状の高まり（SX10086）が検出されており、周囲の土壌からはイネ科の珪酸体が多く検出された（桐井ほか 2023）。炭素年代測定では、基盤層の年代が 2σ 570 - 640、畔状の高まりを被覆する土壌の年代が 2σ 660 - 770 で、古墳時代後期から飛鳥時代前半の水田遺構とみてほぼ間違いない。

当地域は、条里制地割が良好に遺存していることが指摘されており（足利 1995）、発掘調査でも現畦畔と重複する位置で、奈良時代の土器を伴った正方位の畦畔が検出されている（桐井

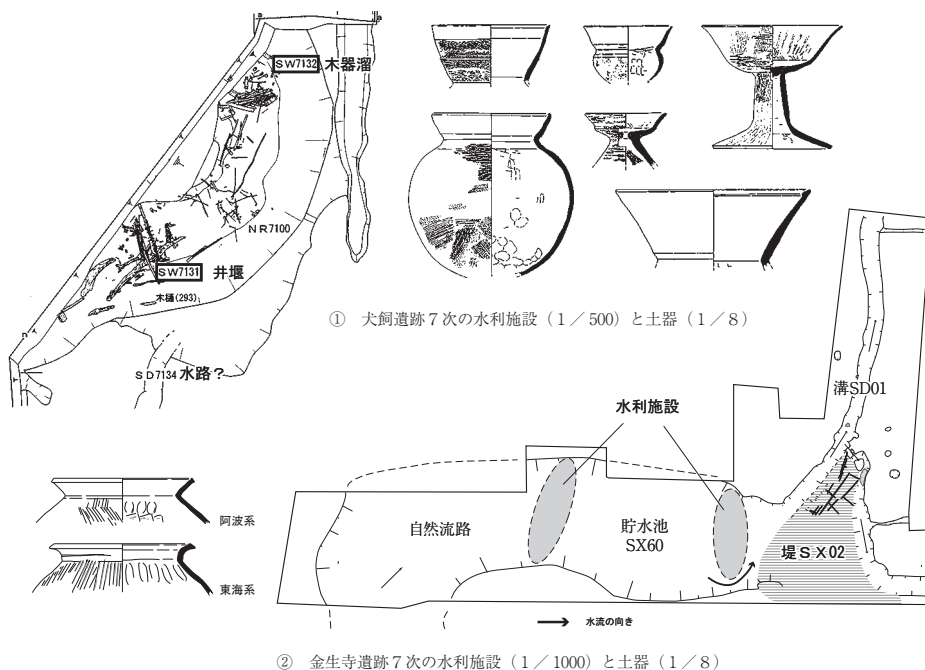


図2 古墳時代前期後半から中期初頭の開発事例（桐井 2021、桐井ほか 2023 から編図）

まず、古墳時代前期から飛鳥時代の層準まではスギ属やヒノキ科が優位で、集水域一帯では

サンプル	遺構の性格	土器型式	年代	マツ属	スギ属	ヒノキ科	コナラ亜属	アカガシ亜属	クリ亜属	イネ科
大飼 3 次 SD01-15層	居館の堀	瓦器 Ⅲ - 3	(13c後)	■	■		■	■	■	■
大飼 3 次 SD01-15層	居館の堀	瓦器 Ⅲ - 3	(13c後)	■	■		■	■	■	■
大飼10次 遺構面		瓦器 Ⅱ - 3	(12c後)	■	■		■	■	■	■
金生寺 3 次 SD220	屋敷の溝	瓦器 Ⅱ - 2	(12c中)							
大飼10次 遺構面			古代?	■	■		■	■	■	■
大飼10次 水田層	条里以前の 水田	(奈良?)	AMS 2σ 659-773	■	■	■	■	■	■	■
大飼 3 次 NR50 II 層	製材痕跡	飛 II ~ 平 III	(7 c中 ~8 c前)	■	■	■	■	■	■	■
大飼 3 次 NR50 III 層	製材痕跡	TK43~ 飛 I	酸素 571年	■	■	■	■	■	■	■
大飼 7 次 NR100	流路	TK43	(6 c 後)	*	■	■	■	■	■	■
大飼 3 次 NR50 IV 層	護岸された 流路	~TK208	(5 c)	■	■	■	■	■	■	■
大飼 7 次 NR100- 層	無遺物層		(5 ~ 6 c)	■	■	■	■	■	■	■
大飼 3 次 NR50 V 層		布留 2 ~TK208	(4 ~ 5 c)	■	■	■	■	■	■	■
大飼 7 次 NR100-15層	流路護岸層	(TG232)	AMS 2σ 262-420	■	■	■	■	■	■	■
大飼 7 次 NR100-18層	水利施設	(布留新)	(4 c)	■	■	■	■	■	■	■
大飼 7 次 NR100基底	開析谷基底		AMS 2σ 22-123	■	■	■	■	■	■	■

■ 10%

スギ林を主体する針葉樹林が分布していたと考えられる。また、二次林的要素が強いコナラ属は相対的に産出量が少ない。その上位層の飛鳥時代～奈良時代の層位では、スギ属やヒノキ科が減少し、マツ属やコナラ亜属が増加していることから、この時期を境に、針葉樹林の分布が縮小し、二次林的要素をもつ照葉樹林の分布が拡大していた可能性がある。それと連関して、イネ科の産出率が上昇しており、この間に段丘上では水田域が拡大するとともに、周辺の森林環境も大きく変化したと読み解くことができる。

さらに、今回提示した中で、極めて高い局所性を示すクリ亜属に注目すると、古墳時代後期に相対的に花粉の量が少なくなっている。つまり、古墳時代前・中期は、流路沿いの林分を部分的に残存しながら開発が行われたのに対し、古墳時代後期後半以降は流路沿いを含めての林分伐採が強まったとも考えられ、地域内で面的に森林環境が変化するような開発が行われたとみることができるのである。

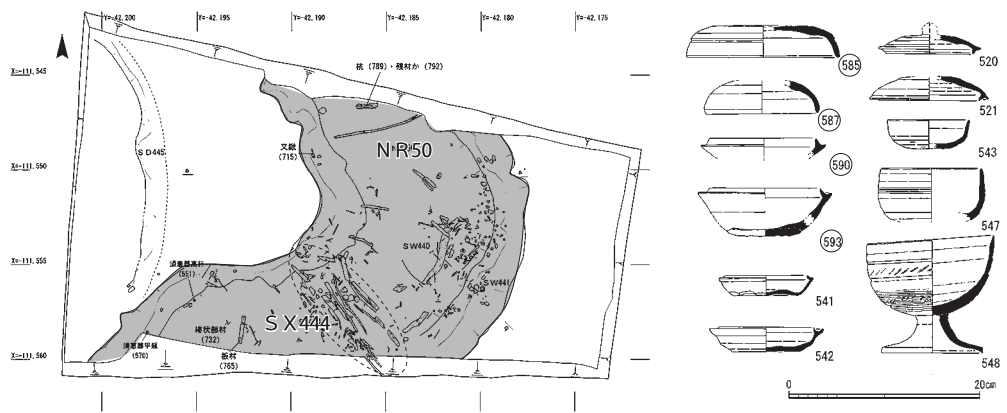
以上のように、当地域における古代以前の耕地開発は、Ⅰ、古墳時代前期後半から中期初頭、Ⅱ、古墳時代後期後半から飛鳥時代前半、Ⅲ、奈良時代中頃以降の3段階を想定しうる。以下では、開発が大規模化したと考えられるⅡの時期の背景について、詳細に検討したい。

6世紀末の画期と木材加工遺構 当時期の遺構としてとりわけ注目されるのは、犬飼遺跡3次調査で検出された開析谷 NR50 と、その内部で検出した木材集積 SX444 である（図3：桐井ほか2022）。なお、SX444の基底となる層位からは、樹皮付きの広葉樹材が2点出土しており、酸素同位体比分析で伐採年が571年、569年であることが判明している。TK43型式期の須恵器を伴う。

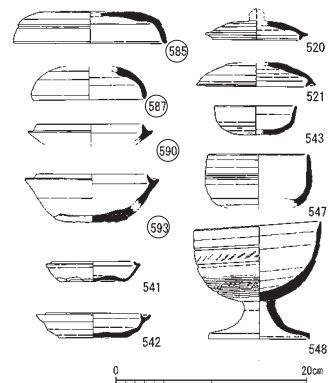
開析谷から大量に出土した自然木を含む有機質遺物については、そのすべてを現地で確認し、わずかでも加工痕跡を認めたものについては取り上げて分類を行った。用途のわかる木製品は全体の4～7%に過ぎず、用途不明のうす板や棒、あるいは材や加工時の残材・木屑がおおよそ70～80%を占める⁽²⁾。また、飛鳥時代の層位（Ⅲ層）では削りカス（木材加工のはつりくず等）と残材の比率が比較的高い。

開析谷の中で検出した SX444 は、開析谷に直行する方向に木材を集積した遺構で、歩み板状の板材や芯持ち丸太材で構成される。板材は、厚さが3～5cm、幅が15～18cm 台と、緩やかなまとまりが認められる一群である。奈良時代の記録によると、流通する木材の規格は樽が幅6寸（約18cm）、厚さ4寸（約12cm）であるという（岡田2005）。SX444から出土したものは加工途中のものや木材の最外面に近いものも含むため、樽や歩板そのものではないが、幅に規格が認められることは重要である。残材や削りカスの存在と合わせて考えると、樽や歩板などの木材素材の加工場の存在が想定できる。

奈良盆地周辺で木材加工遺跡の検討を行った青柳泰介の研究では、杣（生産地）は伐採所、製材所、集積所の総称で、樹皮や節が大量に含む伐採所に対し、製材所（集積所）は小ぶ

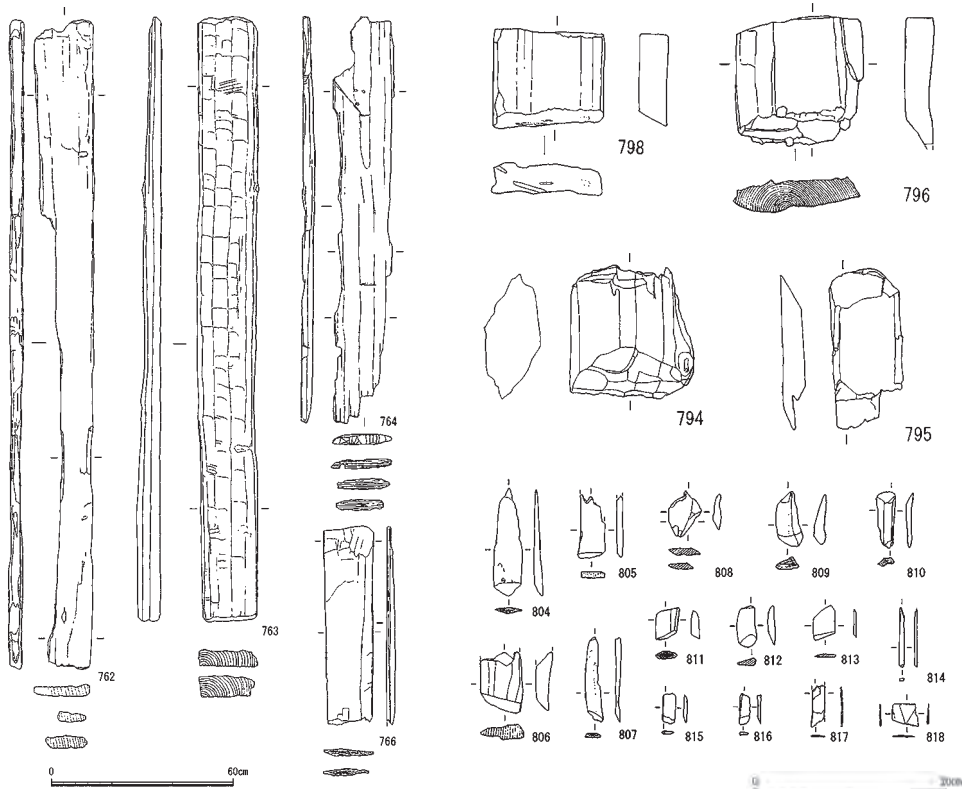


①開析谷NR50遺構図（1／400）



②NR50出土土器（1／8）

(○は確実にS X444に伴う土器)



③木材集積S X444構成材（1／25）

④NR50出土 木質加工痕（1／8）

図3 開析谷NR50と出土遺物（桐井ほか2022から編図、遺物番号は報告書に準拠）

りな加工屑が多く、製品・未製品が少なく、板材等の現在が多いことが示されている（青柳 2009）。背後に未開発の山地が控え、淀川水系の大堰川の支流である犬飼川にアクセス可能な立地にある当遺跡は、木工資源獲得には極めて優位な立地にある。犬飼遺跡における製材所は、背後の森林から獲得した原木を出荷できる板材や樽に加工するような中間加工施設であった可能性が高い。なお、先に示した花粉分析では、飛鳥時代から奈良時代の間に針葉樹の花粉が激減しており、この間に背後の森林資源が収奪傾向にあったことは明らかである。

丹波国内には奈良時代の山国杣が想定され、古代には近畿地方中枢部に木材を搬出する地域であった（西山 1977、橋本・百瀬・岡田 1997）。他にも、長屋王家木簡にみられる「丹波杣」、法華寺金堂の山作所など丹波の森林資源は古代においては多く利用されていた。丹波山地奥地の天若遺跡（三好 1994）などが具体的な杣として想定されてきたが、丹波における木材調達に奈良時代以前に遡るのであれば、木材資源が豊富な奈良時代以前については亀岡盆地内での木材資源の調達も視野に入れる必要があろう。曾我部地域は、畿内全域での事例の少ない飛鳥時代の木材供給地であり、かつ丹波国内としては出現期的な杣の事例と考えられる。

当地域の古墳時代後期後半に始まる開発は、花粉分析の結果から見ても、森林資源の獲得と不可分である。森林資源の獲得が外部からの要請によるのであれば、地域の開発にも外的要因を想定することができよう。秦氏が関与した葛野大堰を含む地域の開発はその端的な事例といえる（古閑 2020）。さらに進んで、その背景に中央政権との関係をもった屯倉設置に伴う開発とみることも不可能ではないだろう。

4. 7 世紀の亀岡盆地の集落と古墳

次に、亀岡盆地全体の様相から曾我部町の遺跡の位置付けを検討してみよう。古墳時代の亀岡盆地の遺跡の多くは大堰川沿いの沖積平野沿いに展開する。極めて単純化し、遺跡毎の建物遺構の検出棟数だけを見たとき、古墳時代中期中葉、古墳時代末～飛鳥時代前半、奈良時代に遺跡数が増加することが分かる（図 1）。このうち、古墳時代中期については、池上遺跡や里遺跡、鹿谷遺跡など、渡来人が開発に関与したことが想定されており（高野 2014）、奈良時代については国府・国分寺・山陰道といった国家主導のハード面の整備に伴い地域全体の開発は進展したことを論じたことがある（桐井・名村 2021）。

一方、古墳時代末～飛鳥時代前半については、前述の 2 時期と比較すると地域全体として遺跡が増加するわけではないが、前段階に遺跡密度が低かったエリアにおいて、局所的に手工業生産の痕跡を伴う特殊な遺跡が出現することが特徴である。先述してきた犬飼遺跡周辺や、八木嶋遺跡がその具体的事例として挙げられる^③。鹿谷遺跡や太田遺跡など中期に形成された密集度の高い遺跡は 6 世紀後半までに途切れるものが多ことから、集落の動向を考えるうえで



図4 曾我部町の古代集落と古墳

明の古墳が多数含まれることには注意が必要だが、それを差し引いたとしても、現状で検出されている居住遺構との不均衡は明白であり、先述の菱田の説明は魅力的だ。前項での検討結果を踏まえるのであれば、屯倉設置に伴い、外来集団による開発が進んだと説明することが可能である⁽⁴⁾。

5. 結 語

以上、推論を重ねることとなったが、古代の亀岡市曾我部町の地域社会の展開について整理した。屯倉が推定される当地域において、古墳時代後期後半以降、開発が活発化することは重要であり、一つのケーススタディとして事例を提示することができたのではないだろうか。また、その背景には木材資源の調達という性格を想定したが、近畿およびその周縁では極めて珍しい事例である。曾我部町内での発掘調査は現在も進行中であり、今後さらに検討を深めていきたい。

謝 辞

本論は、亀岡市犬飼遺跡、金生寺遺跡の調査担当として報告書をまとめる過程で得た知見が基になっている。その間、同僚の竹村亮仁、菅博絵、名村威彦の各氏からは多くの教示を得た。また、花粉分析の成果については辻康男氏の教示によるところが大きい。古代の柚については青柳泰介氏、古閑正浩氏から多くを学んだ。記して感謝申し上げる。

は、一つの画期としてもよい。

7世紀における古墳・集落の画期は各地で指摘されており、各地で外的要因による開発が進行したことが想定されている（菱田 2013）。菱田が特に注目するのは、集落と古墳の動向の不一致であり、集落が希薄な地域で古墳が展開することは、地縁関係を持たない新出の集団が墓地とした可能性を説く。先述してきた曾我部地域においては、近年、法貴・法貴北古墳群の調査が進み、6世紀中葉を端緒に7世紀前半に大規模化する群集墳であることが明かなりつつある（竹村 2024）。未調査のため時期不

註

- (1) 犬養部については、その後、生田敦司氏は犬養部自体がいくつかの系統に分別可能であることを説き、多様なイヌ需要に対してイヌを供出したことを指摘しているが（生田 2018）、アガタやミヤケ、クラにかかわる可能性を排除しておらず、その点では篤説は現在でも説得力がある。
- (2) また、製品の中には刀形や神頭といった祭祀的な性格の遺物も含まれる一方、農工具等は少ない。一帯が居住域とは一線を画す空間であったと考えられる。
- (3) 八木嶋遺跡は豪族居館とされてきたが、近年屯倉と再評価されている（菱田 2021）。
- (4) なお、交通路についても付言するなら、奈良時代の古山陰道は川東を通過するが（足利 1995）、それ以前の官道は摂津から曾我部町を通過するルートがあったことが想定されている。8世紀には本流から外れるが、8世紀第1四半期の造営とみられる與野廃寺や、南条古墓や法貴北古墳群で初現期の火葬墓が検出されるなど、亀岡盆地では初期仏教文化の痕跡が最も色濃くみられる地域である。それは、飛鳥時代以来、外来集団による積極的な開発が行われてきたことが素地となり、地域社会が展開したことを示す一例といえよう。

引用・参考文献

- 青柳泰介 2009「木材の「原材」生産と流通に関する一考察」『木・ひと・文化』出土木器研究会
- 青柳泰介 2019「Ⅲ 大和の古墳時代木材生産地の様相」『古墳時代王権中枢の木材利用に関する総合的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 足利健亮 1996「第六節 村落と条里」『新修亀岡市史』本文編第1巻 亀岡市史編さん委員会
- 網 伸也 2005「淀川水系のミヤケ」『考古学ジャーナル』No. 533 ニュー・サイエンス社
- 生田敦司 2018「犬養氏と犬養部の理解に関する現状と課題」『日本書紀研究』第32冊 日本書紀研究会
- 上田正昭 1961「丹波県の発展」『篠村史』篠村史編纂委員会
- 浦 蓉子 2020『木屑を考える 古代の木工活動を検討するための一試論』（独）国立文化財機構奈良文化財研究所
- 岡田文男 2005「林業一搏の生産と流通」『列島の古代史 ひと・もの・こと』2 暮らしと生業 岩波書店
- 奥村清一郎・柴 暁彦・原田三壽 1994「八木嶋遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第56冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 加藤謙吉 1983『蘇我氏と大和王権』吉川弘文館
- 鎌田元一 2001「郡評施行の歴史的前提」『律令公民制の研究』塙書房（初出 1980）
- 桐井理揮・名村威彦 2021「京都府における集落の構造と変遷」『古代集落の構造と変遷1』第24回 古代官衙・集落研究集会報告書 （独）国立文化財機構奈良文化財研究所
- 桐井理揮 2021「金生寺遺跡第5・7次（F地区）」『京都府埋蔵文化財情報』第139号 （公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 桐井理揮・引原茂治・上井佐妃・名村威彦・黒坪一樹ほか 2022「犬飼遺跡第2・3次」『京都府遺

- 跡調査報告集』第185集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
 桐井理揮・菅 博絵・名村威彦・引原茂治・松井 忍 2023「犬飼遺跡第7・10次」『京都府遺跡調査報告集』第192集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 古閑正浩 2020「桂川水系における集落の展開と造墓の隆替」『考古学研究会第10回シンポジウム 地域研究に基づく古墳時代の集落構造と社会 発表要旨集』考古学研究会関西例会
- 佐々木尚子 2021「京都府域の植生変化と人間活動」『埋蔵文化財ニュース』184 花粉分析からみた都城造営と植生変化（独）国立文化財機構奈良文化財研究所
- 千田 稔 1975「ミヤケの地理的実態―畿内とその周辺における立地と地割の問題―」『史林』第58巻第4号 史学研究会
- 竹村亮仁・名村威彦・三好博喜 2024「犬飼遺跡第4・6・9次」『京都府遺跡調査報告集』第193集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 館野和己 1978「屯倉制の研究」『日本史研究』190 日本史研究会
- 館野和己 1991「ミヤケ制再論」『奈良古代史論集』2 真陽社
- 西山良平 1977「奈良時代「山野」領有の考察」『史林』第60巻第3号 史学研究会
- 仁藤敦史 2002「書評 鷲森浩幸著『日本古代の王家・寺院と所領』」『日本史研究』第474号 日本史研究会
- 橋本義則・百瀬正恒・岡田文男 1997「杣・木材の漕運と京内の津」『長岡京左京出土木簡』1 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第16集 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 菱田哲郎 2013「7世紀における地域社会の変容―古墳研究と集落研究の接続をめざして―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 国立歴史民俗博物館
- 菱田哲郎 2021「丹波国船井郡域の開発と屯倉」『京都府埋蔵文化財論集』第8集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 黛 弘道 1965「犬養氏および犬養部の研究」『学習院史学』2号 学習院大学
- 三好博喜 1994『天若遺跡』京都府遺跡調査報告書第20冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山路直充 2005「文献史料をめぐる在地の模索」『考古学ジャーナル』No. 533 ニュー・サイエンス社
- 和田 萃 1995「丹波と倭王権」『新修亀岡市史』本文編第1巻 亀岡市史編さん委員会